

自治体文学賞で地域文化を活性化



つづくじゅんや
都竹淳也
ひだ
飛騨市長(岐阜県)



やまかわ ゆりこ
山川百合子
そうか
草加市長(埼玉県)



司会・コーディネーター

ほそかわ たまお

細川 珠生

政治ジャーナリスト



ほんぼう てるお
本坊輝雄

みなみ
南さつま市長(鹿児島県)



みなみ でけんいち
南出賢一

いずみおおつ
泉大津市長(大阪府)

地域ゆかりの作家や歌人・俳人の顕彰、地域の文芸活動の振興などを目的に創設されている自治体主催の文学賞。若者の読書離れが指摘される中で、新人作家の発掘にとどまらず、市民の読書・創作活動の推進、都市の認知度向上など、さまざまな効果が出ています。また、近年は地域振興や地域資源の再発見、シビックプライドの醸成などを目指して、地域産業や独自の歴史文化をテーマにした、ユニークな文学賞を創設し、注目を集める自治体もあります。

座談会では、文学賞を創設し、地域文化の活性化を目指す山川・草加市長、都竹・飛騨市長、南出・泉大津市長、本坊・南さつま市長にお集まりいただき、各文学賞創設経緯や特徴、市民の応募を増やすための工夫、文学賞を生かしたまちづくり、AIが急速に発展する中で求められる取り組みなどについて、幅広く語っていただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

文学賞創設の経緯と歩み

細川 地域の文化や文芸活動の振興を目的に多くの自治体が文学賞を創設しています。それでは各都市で文学賞を創設された経緯などについてお話しください。

山川 草加市は、江戸時代に奥州・日光街道第二の宿駅として整備された宿場町で、松尾芭蕉の紀行文『おくのほそ道』の冒頭にその名

が登場します。今でも昔の風情が残るまちで、特に市の中心部を流れる綾瀬川に沿った松並木「草加松原」は『おくのほそ道』の時代の雰囲気を感じさせる風景景観として、国の名勝にも指定されています。

そうした芭蕉との縁を生かした「奥の細道・芭蕉企画事業」の一環として、平成4年に地域文学の振興を目的に創設したのが「奥の細道文学賞」です。さらに、平成24年には日本文学研究の第一人者で、同賞の選考委員を長年務められたドナルド・キーン先生の功績をたたえるため、新たに「ドナルド・キーン賞」も創設しました。「奥の細道文学賞」は、旅をテーマにしたエッセイや紀行文、「ドナルド・キーン賞」は『おくのほそ道』や芭蕉、その他近世の俳人・作品に関する評論を募集し、優秀作品を表彰しています。

両賞とも多くの市民・団体の協力を得ながら、3年に1度、作品募集を行い、第1次選考、第2次選考、最終選考を経て、受賞作品を選考しています。昨年10月には第11回「奥の細道文学賞」、第5回「ドナルド・キーン賞」の受賞作品を発表、本年2月に授賞式を行うとともに、受賞作品集も刊行しました。

都竹 飛騨市は、昭和21年から18年の長きにわたり、朝日新聞の「天声人語」を執筆した故

荒垣秀雄の出身地です。平成30年に生家跡地に顕彰石碑を建立したのを機に、市では「荒垣秀雄顕彰作文コンクール」を創設しました。荒垣が執筆した当時の「天声人語」と同じ800字で、自分の考えや思いを言葉にすることで表現力や想像力、発想力を育むとともに、飛騨市が生んだ偉大な先人を語り継ぎ、顕彰することを目的にしています。毎年、個性的な作品が全国から寄せられており、同コンクールを通じて作文文化が着実に定着してきたと感じています。



松尾芭蕉が
『おくのほそ道』の旅で
草加市を訪れた縁を生かして
「奥の細道文学賞」を
創設しました。

山川 百合子
草加市長(埼玉県)



また、飛騨市では、市が実施する平和事業の一環として、令和5年度には、市内の小・中学生を対象にした「飛騨市〆平和なまち〆絵画コンテスト」と、全市民を対象にした「飛騨市平和の短歌コンテスト」を実施しました。さらに、平成30年度には、民間主導の取り組みと

して、本市神岡町に約半世紀前に造られた「立ち達磨」(立ち姿の達磨の銅像)にちなんだ「飛騨・神岡短歌コンクール『女神へ贈るラブレター』」が始まりました。「立ち達磨」の視線の先にアメリカ・ニューヨークの自由の女神像がある。しかし、女神像はそれに気付かず背中を向けている。そのことに着想を得た住民有志の実行委員会が、恋い焦がれる「立ち達磨」の代わりにラブレター(恋の短歌)を募集するコンクールを企画したのが始まりです。初回の応募者は600人余りでしたが、第6回(令和6年)は2200人(応募件数は5641首)と順調に数を増やし、今や日本を代表する短歌コンクールに成長しました。

南出 泉大津市は、毛布やニットなど、繊維産業を中心に商工業が発展したまちです。特に毛布は、明治20年ごろに日本で初めて製造された地であるとともに、現在では国内生産の約9割を本市産が占めています。

市では、こうした「繊維のまち・泉大津」を全国にPRし、地域産業の活性化を図ることを目的に、平成24年度に市制施行70周年事業の一環として、「泉大津市オリアム随筆賞」を創設しました。ちなみに、賞の名称である「オリアム」は、毛布・ニット・毛織物などを連想させる「織(オリ)」と「編(アム)」に由来しています。

「衣服や繊維製品にまつわる思い出や感動したことなど、繊維製品に触れる内容」をテーマに、毎年6月から9月の約4カ月で募集を



「第11回奥の細道文学賞」「第5回ドナルド・キーン賞」の受賞者・選考委員と市長(草加市)

行い、1次選考、最終選考を経て受賞者を決定します。選考委員には、人気推理小説作家の有栖川有栖先生をはじめ、4人の著名な文化人が務めています。

寄せられる作品数は300点以上。涙なしに読むことができない感動的な作品が多く、衣服や繊維製品がいかにそれぞれの人生と深く結び付いているか、再認識させられます。令和4年度には、市制80周年を記念して、過去11回の受賞作品を収録した『泉大津市オリアム随筆賞作品集』を発行し、図書館や学校に配布しています。



文芸は子どもたちの
総合力を育む上で
有効な取り組み。
継続して取り組むことで
感受性も磨かれます。

都竹 淳也
飛驒市長(岐阜県)

本坊 「いにしへの道を聞きても唱へても わ
が行ひにせずばかひなし」(昔からの立派な教
えをいくら聞いても、またただけ口先で唱
えても、自分で実行しなければ何の役にも立
たない)。これは、16世紀に薩摩統一の基礎を
築いた戦国武將で、「島津家中興の祖」ともい

われる島津忠良(日新公)が作った「日新公いろ
は歌」の1首です。日新公は、5年余りの歳月
をかけて、人として守るべき道徳や人生の指
針を47首の和歌に織り交ぜて完成させました。

江戸時代には、薩摩藩士の子弟教育(郷中教
育)の根幹として用いられ、明治維新の原動力
となった西郷隆盛や大久保利通ら、多くの優
れた薩摩の若者を育みました。現在でも、ゆ
かりの地である南さつま市では、警察署の署
訓として掲げられたり、保育園児が暗唱した
りするなど、その教えは脈々と受け継がれて
います。

この日新公いろは歌を広く知ってもらうと
ともに、新たな短歌文化の創造、文化活動に
よる青少年の健全育成、文化振興を図ること
を目的に、平成28年度から始まったのが「南さ
つま『いろは』まごころ短歌大会」です。第5回
(令和2年度)から現在の「南さつま市『日新公
いろは歌』短歌大会」に名称を変更しましたが、
第9回(令和6年度)には全国から1万333
首の応募があり、277首の入賞作品を選考
しました。

市民の応募数を増やすために

細川 各自治体では、全国から作品を募集し
ていますが、地域の文芸活動を振興するた
めには、市民の応募を増やすことも重要だと思
います。この点について、工夫していること
はありますか。

山川 草加市では文学賞の他に、俳句・短歌・

小説などの文芸作品を毎年募集し「ふれあい文
芸草加」という文芸誌も刊行しています。現在
までに40号を発行しており、市民の文芸への
創作機運を醸成していると感じております。

また、文学賞は、応募数としては全国公募
のため全体の中では限られた数となりました
が、そんな中でも今回行いました第11回「奥の
細道文学賞」では、2人の市民が入賞しました。
これを励みとして、多くの市民が賞に応募し
てくれることを期待しています。また、今後
新たな仕掛けを考え、さらなる応募数増加に
つなげていく必要性も感じています。



「荒垣秀雄顕彰作文コンクール」表彰式の様子(飛驒市)

駅前商業ビル内に 移転開設した 市立図書館を拠点に 市民の文芸活動の 振興を図っています。



南出 賢一
泉大津市長(大阪府)

都竹 俳句や短歌、さらには作文などの文芸は、自分の感受性を基に、日常の出来事の中から一瞬を切り取って、限られた字数の中で表現する活動です。こうした言葉による創作活動は子どもたちの総合力を育む上で、非常に有効な取り組みだと考えています。

私は「荒垣秀雄顕彰作文コンクール」の審査

員を務めています。毎回、継続して応募してくれる子どもたちの作品を読んでいると、以前に比べて文章力も付いてきており、感受性も磨かれているのがよく分かります。そうした教育効果も考えて、多くの子どもたちに作文コンクールへ参加してもらいたいと考えています。が、周知が難しいですね。学校を通じて賞への応募を呼び掛けても、夏休み前には、他にも各種コンクールがあつて、結果的に埋もれてしまうこともあるようです。他方で、朝日新聞社の協力を得て、記者による作文講座を開くなど、地道な活動も展開しています。こうした取り組みを進めながら、文章を書くのが好きになり、主体的に応募してくれる子どもを増やしたいと考えています。

本坊 南さつま市でも全国の自治体と同様に人口減少が進展し、小学校の統廃合が進みましました。市長就任時は22の小学校がありました。が、今では小学校7校、義務教育学校2校という状況です。「南さつま市『日新公いろは歌』短歌大会」は市内の小中学校の協力の下で、多くの子どもたちが参加していますが、統廃合により学校の規模が大きくなるにつれて、熱心に取り組む学校と、そうでない学校との差が広がってきているように感じます。

日新公いろは歌は、人生の指針となる大切な教えです。短歌大会を盛り上げるためにも、また、多くの子どもたちに、日新公の教えに触れてもらうためにも、学校間でばらつきが出ないようにして、参加人数をさらに増やし

ていきたいと思っています。

南出 泉大津市は、令和3年9月に駅前の商業ビル内に市立図書館を移転開設しました。以来、2年10カ月で、来館者は100万人を突破するなど、大変な賑わいを見せており、セミナーやイベントなども年間400以上開催しています。市ではこの図書館を中心に、学校との連携を深めたり、調べ物学習コンクールやエッセー講座を実施したりして、市民の読書活動推進や文芸振興を図っています。

市では、毎年3月に授賞式と併せて、「オリオンエッセー文学フォーラム」を開催していま



選考委員の登壇の下、エッセーをテーマとした対話形式の「文学フォーラム」を開催(泉大津市)



地域の歴史文化が
廃れることがないように
地域に根付いた教えや方言を
子どもたちに伝えたい。

本坊 輝雄
南さつま市長(鹿児島県)

す。選考委員が登壇し、受賞作品の選評やエッセーの魅力などをテーマに語り合う、文芸・文学好きの人たちにとっては大変ぜいたくな催しですが、なかなか参加者が増えないのが課題となっていました。

しかし、図書館での文芸振興活動に加えて、

文学賞をまちづくりを生かす

事前の周知活動を充実させたところ、今年の3月のフォーラムには昨年度の2倍にあたる160人を超える人が参加しました。エッセーを含めた文芸に関心を持つ市民が着実に増えていることを感じます。本年度の賞の市民応募数がどれだけ増えるか、早くも楽しみです。

細川 各都市ではこうした文学賞を、どのように地域振興やまちづくりに生かしていますか。

南出 第13回「泉大津市オリアム随筆賞」(令和6年度)では、背守りに関するエピソードが書かれた作品が受賞しました。背守りとは子どもものの着物の背中に施された刺しゅうのことで、お守りや魔よけの意味が込められています。

この作品をきっかけに、地域の中では、改めて背守り文化に着目し、地元の神社と連携して、観光施策を推進できないかといった提案がなされました。これはあくまでも一例ですが、文学賞は地域資源の再発見や地域振興のヒントを与えてくれる、有意義な取り組みだということを改めて認識しました。

市民からも、「文学賞を通じて、繊維のまちとしての、自分たちのアイデンティティーを再認識できた。市と一緒にシテイプロモーションを進めていきたい」といった声が寄せられています。

都竹 地域の文学賞は、工夫次第で地域資源に光を当てて、地域振興を図るきっかけになりますよね。「飛騨・神岡短歌コンクール」『女神

へ贈るラブレター』の「立ち達磨」はその典型です。実は、この「立ち達磨」は、建立から長い年月が経過していたこともあり、コンクール開始時には市民にも半ば忘れられた存在となっていました。その「立ち達磨」に地元の高校の文芸部で盛んに行われていた「短歌」と結び付けて、新たな短歌コンクールを始めたことで、地域内外で大きな話題になり、観光振興、そして短歌文化のさらなる振興につなげることができました。地域の可能性に市民が目を向けるきっかけにもなりました。

山川 草加市は、奥の細道に縁のある自治体



「日新公いろは歌」を石に刻んだ歌碑を清掃する子どもたち(南さつま市)

が集う「奥の細道サミット」に加盟しています。令和4年には、加盟自治体の関係者を招いて「奥の細道サミットin草加」を開催し、市内のさまざまな場所で関連イベントを実施しました。また、文学賞の最終選考委員を務められた先生と「草加松原」の風景地を吟行するイベントの開催など、奥の細道と文学賞を通して、草加の持つ歴史的遺産や草加らしい文化芸術を全国に発信しています。

本坊 南さつま市では、「日新公いろは歌」に



親しみ、理解を深めることを目的に、短歌大会と並行してさまざまな取り組みを行っています。その一つが『日新公いろは歌』かるた取り大会です。長年、地元の青年会議所との連携の下で大会を開催し、多くの児童が参加しています。

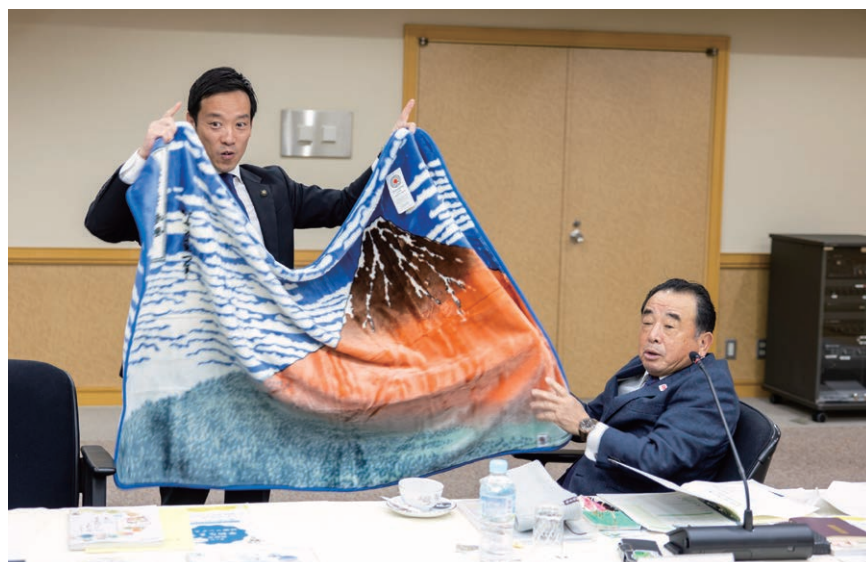
また、日新公を祭る竹田神社の境内の並木道「いにしへの道」には、「日新公いろは歌」を石に刻んだ47もの歌碑が建てられています。この地域では地元の子どもたちが率先して、この歌碑を清掃する「いにしへの道クリーン作戦」が進められています。さらに、日新公いろは歌を公民館や学校などに掲示して身近に触れ合う取り組みなども行われています。

本年、南さつま市は市制20周年を迎えますが、記念式典のオープニングは保育園児の日新公いろは歌の暗唱から始めることにしています。日新公いろは歌を心の支えとして、市民と共に手を携えてこれからのまちづくりに取り組んでいく。そうした機運を醸成していきたいですね。

これからの文学・文芸の在り方

細川 昨今、生成AIが急速に進化しています。こうしたテクノロジーは、文学賞はもちろんのこと、子どもたちへの教育にも何かしらの影響を与えるものと思いますが、いかがでしょうか。

南出 限られた人員で行政サービスを維持していくには、AIを効果的に使いこなすスキ



ルが必要になります。教育現場においても、本年度は教員がAIを十分に扱えるよう、関連事業も予算化しました。今後は、子どもたちの学びにも生かしていく必要があると考えています。

一方で、語彙^{ごい}の習得など、母語を身に付けるための基礎の徹底は欠かせません。これこそ教育の「不易」の部分ですから、そこは大事にした上で、AIや英語の学習なども進めていく。そのバランスが重要になってくると思



細川 珠生
政治ジャーナリスト

います。

都竹 先日、ChatGPTに短歌を作らせてみましたが、思った以上に立派な歌を作ってくれました。生成AIが本格的に登場してまだ間もないのに、このレベルですから、今後はさらに進化していくことは間違いありません。

その中で、文芸が重視すべきことは何なのかを考えると、私は日常生活における感受性だと思っています。友人との関係、地域の人とのコミュニケーションを通じて感じたことを短歌や俳句、作文の形式の中で自分なりに表していく。体験を通して感じたことを、自らの感受性を用いて表現することは、AIにはできません。

今後、文芸活動を通じて、子どもたちの感受性を養う教育はこれまで以上に大切になってくるでしょう。文学賞においても審査をする側がその意義を十分に認識して臨む必要があると思います。

山川 文学とAIについては考えることは難

しいことだと思えますが、私は、自分の言葉を自分自身が尊ぶことは、AIにはできない、人としてとても大切なことだと考えています。

言葉こそ、自分そのものだと思うからです。暮らしの中で起きたことを、どのように表現するのか。これは、その人がどういう人間であるかを周囲に示すものでもあると思います。そのことは、子どもたちや職員にもこれまで以上にしっかりと伝えていきたいですね。

本坊 私も他人とどう向き合い、自分の感情を言葉でどう表すかという問題は、生きていく上でとても大切なことだと考えます。学校現場や地域においても、その部分は大切にしていかなければいけません。

それに加えて、言葉の問題を考える際に、無視できない要素があります。それは「方言」です。私が子ども時代には「鹿児島弁を使っているはいけません。標準語を使いましょう」という教育を受けました。しかし、方言には標準語にはないぬくもりがありますし、「方言を聞きたい」と話す観光客も多いですよ。AIが進化する中で、むしろこれからは、地域の歴史文化が廃れることがないよう、日新公いろは歌の教えや独自の方言など、長年にわたり地域に根付いた伝統をしっかりと子どもたちに教えていく必要があると思います。

細川 文学賞というと、新人作家の登竜門というイメージが強くありますが、各都市では、都市のPR、文芸活動の振興、子どもたちへの教育など、文学賞を地域づくりに幅広く生

かされていきました。また、地域の歴史を掘り起こし、それを文学賞の形で発信することで、都市の認知度向上だけでなく、市民の地域への誇りにもつなげることがよく分かりました。

今後市民や各団体と連携しながら、文学賞をさらに発展させるとともに、文学賞を生かした取り組みも活発に推進し、さらなる地域文化の活性化につなげていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

(令和7年4月9日、全国都市会館にて開催)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は7月号に掲載予定です。

